

児童生徒の学びを生かしたつながりのある中学校英語の授業の開発

高知大学大学院総合人間自然科学研究科教職実践高度化専攻 1年
竹本 佳奈（高知市立大津中学校教諭）

1. 研究の目的

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語編において、これまでの課題として、学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じること、学校種間の接続が十分とは言えず、進級や進学をした後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができていないことが指摘されている。高知県においては「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標は、平成27年度以降公立中学校の設定率は100%であるが、約80%の中学校は設定した学習到達目標を公表しておらず、約35%の中学校は目標の達成状況を把握していない（「平成29年度英語教育実施状況調査」）。また、「中学校組織力向上のための実践研究事業」により、主幹教諭の配置、一人の教員が複数学年を担当する「タテ持ち」の導入、定期的な教科会の活性化、日常的なOJTの活性化、組織的な授業改善や授業力向上のための体制づくりに取り組んでいる。そこで本研究では、タテ持ちの効果を検証し、小学3年生から中学3年生までを見据えた英語教育を充実させる要素を明らかにすること、学校で設定しているCAN-DOリストと、小中連携及びタテ持ちとの関係を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

平成30年6・7月に、実習校の英語教員5名と県内公立中学校英語教員5名を対象に、インタビュー調査・アンケート調査を行った。小中連携については、外国語活動について小学校と引継ぎや共有をしているか、校区の小学校のCAN-DOリストを中学校で共有しているか、外国語活動でどのようなことをしてきたかを生徒に聞いているかの3点、タテ持ちについては、生徒の前年度の学びを共有しているか、タテ持ちは効果的だと思うかの2点を調査内容とし、定性的コーディングによる分析（佐藤，2008）を実施した。

3. 結果と考察

小中連携については、小学校のCAN-DOリストは未設定のため、中学校では小学校のCAN-DOリストは未共有である場合が多かった。また、小学校の外国語活動に関する引継ぎや、CAN-DOリストの共有による小中の接続、小学校の学びを活用した中学校の学習内容の見直しや高度化への期待があげられた。タテ持ちについては、メリットとしては、見直しのある指導ができること、若手教員の学びとなっているという教員個人の効果と、授業内容・テスト内容の変化、学年の差・年度ごとの差の解消という教科としての効果が示された。一方、デメリットとしては、設定された教科会は時間的に不十分なため教員間の確認・共有が不十分となり、結果として個々の教員任せとなっており、教員間のずれの発生、準備時間・準備する量の増加により、授業改善が困難になっていることが示された。

4. 今後の課題

アンケート及びインタビュー調査の結果を踏まえて、提案授業をデザインする。その際、提案授業における教師の認知と生徒の認知の特徴について、提案授業後の教員へのアンケート調査の内容、生徒の振り返りの記述内容・課題等を、①教師自身の発見や気づき、生徒の変化に対する気づき、②授業に対する振り返りの記述内容、パフォーマンス課題の達成状況について分析し、生徒の学びを生かしたつながりのある授業の要素を探る。